

ライティング活動を活性化する指導の在り方について
—構造マップの利用をベースとして—

千葉県立 ○○○○ 高等学校 ○○ ○○ (外国語)

1 研究の背景と目的

現行の学習指導要領は「思考力・判断力・表現力」の伸長と言語活動の充実に重点を置き、英語の授業においては、4技能統合型の授業実践によるコミュニケーション能力の育成が目標となっている。

現在の勤務校において、生徒の授業への取組は非常に熱心であり、リーディングやリスニング活動に積極的に取り組んでいる印象を受ける。しかし、自己表現力としてのスピーキングやライティング活動の面においては、十分に力を発揮できていない生徒が多い。

そこで平成 26 年度の授業実践において、スピーキング力の伸長を企図し、ペアによるスピーチ活動を日常的に行った。その中で活動の質を高め、能力の育成を促進するための指導方法として構造マップを利用した。カング (Kang, 2004) によれば構造マップとは「理解や学習を高めることを目的とし、ある与えられた領域において、構造的知識を示すために、図や図形、チャートなどを使い視覚的な構造にすること」とある。つまり、対象となる英文について、全文を抜き出すのではなく、文中のキーワードを抜き出して、それらを図式化することで全体を概観しようと試みるものである。授業実践において、構造マップを利用することにより、でき上がったスピーチ原稿をただ読むのではなく、話者として、より自然な状態でスピーチ活動に取り組ませることができた。

一方、ライティング活動については、教科書の單元ごとに内容に関するエッセーを書く活動を行った。スピーチ活動においては、多少の間違いがあっても臆することなく話し続けることができても、ライティング活動になった途端、正しい英文を書こうという意識が強すぎるあまりに、表現する内容が乏しくなってしまう生徒が多かった。これでは、「自分の考えや思いを他者へ伝える」というコミュニケーション活動の根本が崩れてしまう恐れがあった。

そこで本研究では、スピーキング活動で有効であった構造マップについて、ライティング活動のアイデア創出に利用する際の有効性を探ることとする。また、英語表現リストの活用や評価基準となるルーブリックの提示など、生徒のライティング活動を活性化する指導の在り方について研究していきたい。

2 先行研究と研究仮説

2.1 先行研究

Widdowson (1983) によれば、「書くことは常に意味交渉の過程をたどるものであり、つまり『コミュニケーション』そのもの」である。ライティング活動における書き手は、読み手に対して自分の考えを伝えようという気持ちが前提となるわけである。これについては、大喜多 (2004) も「本来のライティングとは、近くにいる人であれ、遠くにいる人であれ、既知の人であれ、未知の人であれ、彼らを読み手として何かを伝えるために文を作ること」と述べている。したがって、コミュニケーションの手段としてのライティング活動をどのように活性化す

るのかという視点で考えるとき、「言語的な学習の延長上にある作文，つまりコンポジション (composition) とは明確に区別 (大喜多, 2004)」する必要がある。

次に，コミュニケーション (communicability) という観点に基づく調査を紹介したい。富田 (2002) は，高校生が書いたジャーナル (英文の日記) 150 点をネイティブ・スピーカーたちに読ませ，意味を理解することができるかどうか調査した。その結果，75%以上の英文は正しく理解されていることがわかった。興味深いことに，英文の誤りのうち半数以上を占めていた文法的な誤りについて，理解の阻害を引き起こしたのは，その中の8%程度にしか過ぎなかった。そこで富田 (2002) は「文法的誤りを必要以上に気にすることなく，形式にとらわれず自由に英文を綴る活動を取り入れて，伝えたいメッセージを要領よくまとめて表現する力を養うことが求められている」と結論づけている。

ライティング力について，Grabe&Kaplan (1996) は，あるまとまった文章を創出するのに関与するライティングの構成能力として次の5つを示している。

- ①言語面 (語彙・文法・統語の知識等)
- ②文章構成面 (パラグラフ構成・結束性・論理的一貫性等)
- ③周辺面 (読み手への意識・書く目的等)
- ④内容面 (独創性・論理性・課題との関連性等)
- ⑤プロセス面 (アイデアの創出・下書き・推敲等)

従来の言語的な学習の延長上にある作文，つまりコンポジションにおいて重要視されるのは，これらの構成能力うち，①言語面 (特に語彙や文法面) であると考えられる。一方，Widdowson や大喜多，富田の考察は，その他の能力の重要性を示すものである。

大井 (2008) は，英文作成には，①アイデアの創出，②アウトライン，③下書き，④ピアレビュー (仲間で読み合う)，⑤書き直す (推敲) という過程があるとしている。大井の①アイデアの創出と②アウトラインは，Grabe & Kaplan の⑤プロセス面 (アイデアの創出・下書き・推敲等) 及び②文章構成面 (パラグラフ構成・結束性・論理的一貫性等) と共通している。

本研究では，構造マップを利用したアイデア創出をライティング活動に応用することによりアイデアを整理し，アウトラインを整える上でどのような指導が有効かを探りたい。また，アウトライン作成上有効と思われるフレーズをリスト化した英語表現リストと，評価基準となるルーブリックを生徒に示すことで，それらの有効性を検証したい。

2.2 研究仮説

仮説1 段階的に構造マップを利用することで，ライティング活動の際にアイデア創出の手助けとなるであろう。

仮説2 英語表現に関するリストやルーブリックを継続的に与えることで，パラグラフとしてまとまりのある英文を書くことができるであろう。

3 研究方法

3.1 本研究①

授業で扱った教科書の英文の中で，印象に残ったフレーズを示した上で，感想文を書くというライティング課題を与える。その際に構造マップの使用方法について説明する。必要に応じ

てアイデア創出の際に利用するよう促す。

3.2 本研究②

授業で扱った教科書の英文（本研究①とは異なる）に対して同様のライティング課題を与える。その際に構造マップを利用したアイデア創出を全員にさせる。また、英語表現リスト（表1）を別途配付する。授業内ではそれらの用法について例文を提示しながら解説する。同リストについて、ライティング活動の際に積極的に利用するよう促す。なお同リスト作成時には、『英語表現Ⅱ』の授業で使用している教科書『Vision Quest English Expression II（啓林館）』を参照した。

表1 英語表現リスト

列挙 ・ 順序	to begin with（初めに）、first of all（まず第一に）、first(ly)（第一に）、second(ly)（第二に）、third(ly)（第三に）、finally / last(ly)（最後に）、next（次に）、then（それから）、before（～の前に）、after（～の後で）、earlier（以前に）、later（後で）
例示	for example / for instance（例えば）、such as ～（～のような）
追加	also（～もまた）、too（～も）、as well（～もまた）、furthermore（さらには）、besides / moreover / what is more（その上）、in addition（加えて）
対比	meanwhile / on the other hand（他方では）、in contrast（それに比べて）、while（だが一方で）、whereas（～に対して）、compared with [to] ～（～と比べて）、unlike（～と違って）
類似	similarly（同様に）、likewise（同様に）、in the same way（同じように）、～ as well as ...（…と同様に～も）、also（～もまた）、like（～と同様に）
原因 ・ 理由	because / since（～なので）、because of ～（～の理由で）、for these reasons（これらの理由から）、due to ～ / owing to ～（～のために）、for one thing（1つには）、for another（また1つには）、this is because ～（これは～だからである）、one of the causes is ～（原因の1つは～である）
結果	so（だから）、therefore / thus / accordingly（したがって）、as a result / consequently（結果として）、that's why ～（そういうわけで～）
言い換え	in other words（言い換えると）、that is (to say)（つまり）、namely（すなわち）
要約	in short / in brief（要するに）、in a word（一言で言うと）、in summary / to sum up（要約すると）
結論	in conclusion / to conclude（結論として）

3.3 本研究③

夏季休業中の課題として使用する教材『History of OKINAWA（エミル出版）』について、本研究①②と同様のライティング課題を与える。その際には全員に構造マップを利用してアイデア創出をさせる。また、英語表現リスト（表1）の利用を促す。さらに、パラグラフとしてまとまりのあるライティング活動を活性化するために、評価基準となるルーブリックを作成し、提示する（表2）。そして生徒にライティング課題の評価としてこのルーブリックを適用することを事前に伝える。その上で、これらの基準を満たすことができるよう意識しながらライティング課題に取り組むよう伝える。ルーブリック作成に際してはパラグラフとしてのまとまりを

得るのに必要と思われる内容を項目としている。また (f) ~ (j) については、英語表現リスト (表 1) の利用を促す内容となっている。

3.4 検証方法

3.4.1 アイデア創出

アイデア創出については、米崎(2012)が構造マップを利用したスピーキング活動においては「一般的な傾向として、下位群の生徒たちの間では、英語の量が増え」「上位群の生徒たちに関しては、英語の質が高まるという特徴が見られる」と述べている。そこで、この構造マップの利用をライティング活動に適用した場合にも同様の傾向が見られるのではないかと考えた。そこで本研究①②③で実施したライティング課題の総語数を比較、検討する。本研究①では構造マップを紹介するに留めるが、本研究②及び③では全員に構造マップを利用させる。その結果、総語数に増加が見られた場合には、構造マップによりアイデア創出が容易となったためと判断する。

3.4.2 パラグラフとしてのまとめ

本研究①②③で実施したライティング課題の提出物について、英文全体としての構成にどの程度まとめがあるのかをルーブリック (表 2) に基づいて評価を行う。評価方法は、ルーブリックの項目を満たしていれば 1 点、満たしていなければ 0 点として合計点を算出する (満点は 10 点)。この評価が向上した場合には、パラグラフとしてのまとめが良くなったと判断する。

表 2 ルーブリック

- (a) 何について書くのか述べている。
- (b) 印象に残ったフレーズを示している。
- (c) そのフレーズを選んだ理由を 3 つ提示している。
- (d) そのフレーズを選んだ理由きちんと説明している。
- (e) 主題文と支持文がそれぞれ書かれている。
- (f) 列挙・順序に関する表現を使っている。
- (g) 例示・追加に関する表現を使っている。
- (h) 対比・類似に関する表現を使っている。
- (i) 原因・理由・結果に関する表現を使っている。
- (j) 言い換え・要約・結論に関する表現を使っている。

4 研究計画

4.1 対象生徒・科目・教材

平成 26 年度	対象生徒	1 年生普通科
	科 目	コミュニケーション英語 I 3 クラス (121 名)
	教 材	Perspective English Communication I
平成 27 年度	対象生徒	2 年生普通科
	科 目	コミュニケーション英語 II 3 クラス (122 名)
	教 材	Perspective English Communication II (第一学習社) History of OKINAWA (エミル出版)

4.2 指導計画

期 間	平成 26 年 6 月～平成 27 年 11 月
第 1 段階	平成 26 年 6 月～12 月
	●文献研究及び先行研究の調査 ●予備研究①「夏休みの思い出」

研究 の 内 容 と 方 法	構造マップを利用したスピーキング活動	
	第2段階	平成27年1月～3月
	●予備研究②「冬休みの思い出」 構造マップを利用したスピーキング活動とライティング活動	
	●予備研究③「レッスン7の感想」 構造マップを利用したライティング活動	
	第3段階	平成27年4月～7月
	●本研究① 「レッスン1の感想」 構造マップを利用したライティング活動	
	●本研究② 「レッスン2の感想」 構造マップ・英語表現リストを利用したライティング活動	
第4段階	平成27年9月～11月	
●本研究③ 「History of OKINAWA を読んで」 構造マップ・英語表現リスト・ループリックを利用したライティング活動		

5 研究実践

5.1 予備研究

5.1.1 予備研究①

平成26年9月に、本校1年生6クラス(242名)を対象として、コミュニケーション英語I及び英語表現Iの授業において、「夏休みの思い出」というタイトルでスピーチ活動を実施した。その際に、構造マップを導入し、教師がモデルを示した上で、生徒たちにも作成させた。作成方法として、3点のキーワード(例えば「Trip to Osaka」「Club activity」「Brother's birthday party」など)をまず書かせ、そのキーワードを補足説明する要素(例えば「with my parents」「by train」「in my house」など)を吹き出し状に記していく。なるべく相手にわかりやすいスピーチをするために、5W1Hを意識して構造マップを書くよう指示した。その上で、グループ内で1人ずつ発表するというスタイルで2分間のスピーチ活動を行った。原稿等を書かせることはせず、スピーチ活動中は構造マップによるメモを頼りに発話するよう指示した。生徒の様子は、序盤こそ苦労していたものの、徐々に身振り手振りを加えながら、メモだけでも自分の考えや行動を伝えようとしていた。

今回は試験的に導入したものであり、事前事後の指導はほとんど行わなかった。しかしながら、生徒たちに「構造マップの利用は、自分の考えをまとめる上でメリットがありそうだ」というイメージを持たせることには成功したと感じた。この後は、段階的に構造マップの利用を授業の中に組み込んでいくことで、定着を図ることとする。

5.1.2 予備研究②

平成27年1月に、本校1年生3クラス(119名)を対象として、コミュニケーション英語Iの授業において「冬休みの思い出」というタイトルでスピーチ活動を実施した。その際には前回同様に構造マップを書かせ、その上でスピーチ活動を行った。予備研究①の際に生徒が書いた構造マップの中でも、生徒の考えがよく整理されて表現できているものをいくつかピックアップ

ップし、事前に生徒間で共有した。その結果、予備研究①の時よりも発話数が増加したと報告する生徒が増えた。またスピーチ活動の後、構造マップを見ながら原稿に書き起こすというライティング活動を実施した。この段階では、語彙や文法上のミス等は一切指摘しないことを伝えた上で、できるだけ自分の行動や考えが他者に伝わるよう詳細に書くよう指示した。これは、今後のライティング研究への橋渡しとして位置づけた。

5.1.3 予備研究③

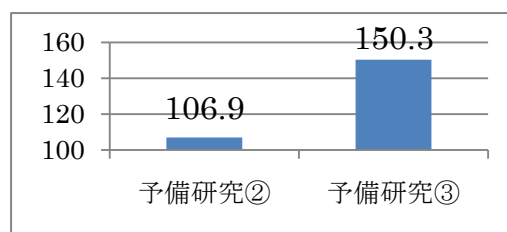
平成27年3月に、本校1年生3クラス(121名)を対象として、コミュニケーション英語Ⅰの授業において「レッスン7の感想」というタイトルで、授業で扱った英文に対する感想文を書かせた。具体的には、本文中で印象に残った1文(語句)を取り上げ、その理由を説明するという形式で行った。その際には、ライティング活動の初めに構造マップを利用したアイデア創出を行わせた。具体的には、プリントの中央に印象に残った1文(語句)を記入し、そこから付随する要素(この課題においては、そのフレーズを選んだ理由等)を吹き出し状に記すよう指示した。そしてこの構造マップによるメモを基に、ライティング活動を実施した。この段階では、構造マップによるメモを見ながら、できるだけ自分の考えが読者に伝わるよう、詳細に書くよう指示した。また、語彙や文法上の誤り等は一切減点の対象としないことも伝えた。生徒には構造マップを書き終えた段階で、4人グループを作り、お互いの構造マップを見せ合うことにより、それぞれの考えを共有させた。多くの生徒が、他者の構造マップを参考に、自身の構造マップに加筆修正を施していた。結果的に、構造マップへの慣れもあり、多くの生徒が非常にわかりやすい構造マップを完成させていた。また、それに比例するように、ライティング活動が活性化しており、後述するように総語数も増加した。

5.1.4 予備研究②③における総語数の比較と考察

予備研究②及び③におけるライティング課題の総語数を比較したものが表3であり、43語以上の伸びが見られた。これは構造マップへの慣れにより、アイデア創出のステップが容易となったため、総語数が大幅に増えたと考えられる。実際、生徒たちのライティング課題の提出物を見ると、総語数の多い生徒の構造マップは、総じて見た目にもわかりやすく、レイアウト等も整理されているという印象を受けた。逆に、構造マップが十分に書けていない生徒は、総じて総語数が少なく、英文の内容も不明確であり、自身の考えを十分に表現できていないという印象が強かった。情意面に関する授業評価アンケートの中で、「英文を書く力が少しずつでも身についたと感じる」の項目を比較した。その結果、肯定的な回答をした生徒の割合が、2学期末では71%だったのに対し、3学期末では82%であった。このことから、生徒自身もライティング活動に対する効力感を得たものと推察する。

また、生徒からは「自分の考えを1文ずつ表現することはできるようになっても、全体としてどのように英文として構成すればよいかかわからない」「文と文のつながりがうまくいかない」という声が多かった。そこで本研究では、アイデア創出という過程に対する指導として構造マップの利用方法について改良を加えた。また、アウトラインの作成において必要となる知識や語句(表現方法)について指導を試みた。

表3 総語数の変化



5.2 本研究

5.2.1 本研究①

平成27年4～5月の授業において教科書のレッスン1を扱った。そこで、単元のまとめとしてレッスン1の内容に関する感想を英文で書くという課題を与えた。この課題は、全クラスに対して同様に10分間の準備時間と15分間のライティング時間を与え、レッスン1の中で印象に残った1文(語句)を取り上げ、その理由を分かりやすく説明するという内容だった。昨年度とは授業の対象となる生徒が半数以上も入れ替わってしまったため、構造マップについては、この段階では作成方法等の提示を行った上で、必要に応じて10分間の準備時間にて利用するよう促すに留めた。実際に構造マップを利用してアイデア創出を行った生徒は、全体の10%未満であった。多くの生徒は、箇条書き形式でメモ書きを行っていた。ライティング活動の実施後、構造マップを利用した生徒のライティング課題の提出物の中から、わかりやすく整理して構造マップを書いているものを取り上げ、全生徒に提示した。これを構造マップの書き方の参考とさせ、また構造マップの有用性についても説明した。

5.2.2 本研究②

平成27年6～7月の授業において、教科書のレッスン2を扱った。そこで全4パートについて、パートが終了するごとに本研究①と同様の方法で感想文を書くように指示した。そしてパート4終了後には、レッスン全体を通じての感想文を書くように指示した。これらのライティング活動中、完成した構造マップやライティング課題の提出物について、こちらで適宜点検した。そして生徒たちの書いた構造マップの中でも、考えや意見がわかりやすく整理されているものを、全生徒にその都度フィードバックした。また、アウトラインの作成において手助けとなる英語表現リスト(前掲表1)を紹介した。これは予備研究を振り返り、生徒のライティング活動にとって手助けとなると感じたものである。授業内では、リスト内のフレーズを用いた例文を紹介し、生徒への定着を図った。表4は口頭及び板書による指導内容である。

表4 英語表現リストを用いた指導

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・(導入文→) 主題文→支持文(→結論文)の流れで書くこと・導入文と結論文(主題文の言い換え)は必要に応じて加えること・支持文としては、重要なアイデアを2～3つ程度示すこと・支持文としては、上記で提示した表現等を用いてパラグラフを構成すること <p>具体的には、「列挙」「例示」「対比」「原因・理由」などが支持文の内容となること</p> |
|---|

これらは、ライティング活動を行う際に便宜上、一定の型を与えた方が書きやすいだろうという考えの基、生徒に示した。生徒たちはライティング活動中、頻繁に英語表現リストを用いていた。ライティング課題の提出物を点検すると、構造マップで自分の考えを整理した上で、英語表現リストにあるフレーズをうまく組み合わせている生徒が多かった。しかしながら、パラグラフとしてのまとまりという点では、まだまだ不十分であるという印象を受け、その点に関する指導の必要性を感じた。

5.2.3 本研究③

平成27年9月、夏季休業中の課題である『History of OKINAWA (エミル出版)』の中から特に印象に残ったレッスンを取り上げて、その中でも特に印象に残った1文(語句)を取り上げ、それを選んだ理由を説明するというライティング課題を与えた。その際、本研究②同様、

ライティング活動の前に構造マップを利用し、アイデアを整理させた。英語表現リスト(表1)も本研究②同様に、適宜使用するよう伝えた。また本研究③においては、ルーブリック(表2)を生徒に事前提示した。これはパラグラフとしてまとまりのある英文を作成するよう促す目的で導入したものである。生徒には、ライティング活動においてこれらの項目を意識して書くように口頭で指導した。

5.2.4 本研究における指導内容の比較

本研究①②③において、10分間の準備時間と15分間のライティング時間を生徒に与えた。15分間のライティング時間について、事前の10分間で用意したメモや構造マップを基に、できるだけ自分の考えが相手に伝わるよう詳細に書くよう指示した。また、構造マップに関する指導内容や10分間の準備時間における構造マップの利用に対する指示内容は次のとおりである(表5)。英語表現リスト及びルーブリックの提示状況も同表に示した。

表5 各本研究における指導内容の比較

研究	構造マップに関する指導内容	英語表現リスト	ルーブリック
本研究①	構造マップ作成方法の説明(任意で利用) 活動終了後に生徒例を提示・有用性を説明		
本研究②	全員に構造マップを利用するよう指示 活動終了後に生徒の例を提示・共有	活動前に提示 (例文にて使用例を確認)	
本研究③	本研究②と同じ	引き続き利用するよう指示	活動前に提示

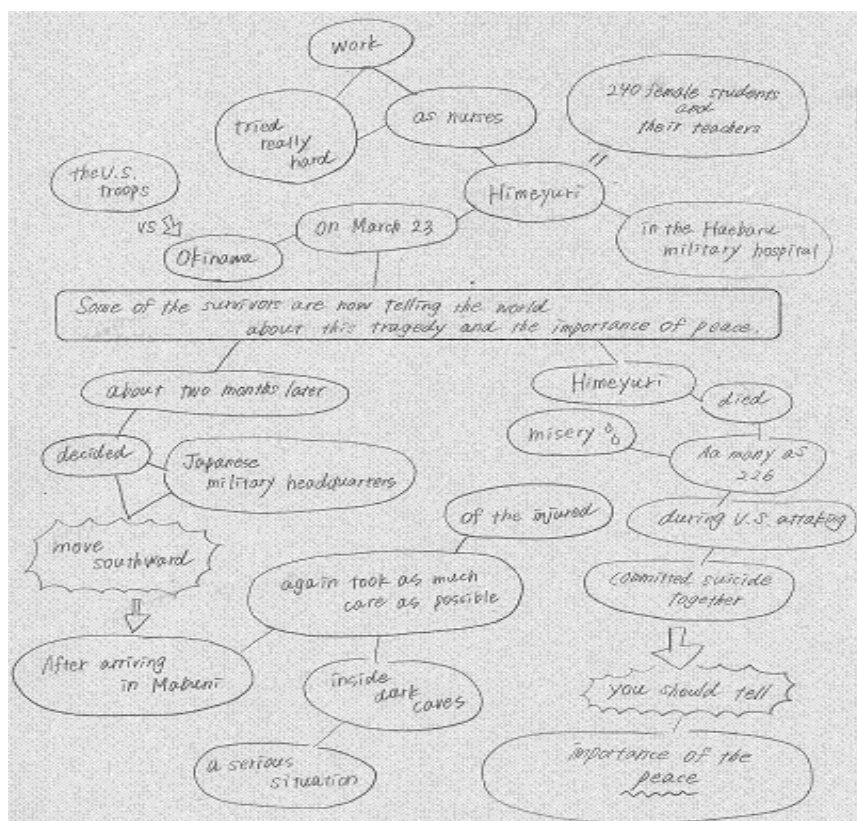
6 研究評価

6.1 仮説1に対する検証(総語数の比較)

本研究①では、構造マップの紹介をし、利用を促す程度であった。一方、本研究②及び③では全員に利用するよう指示した。またその過程において、構造マップの定着を図る指導を行った。その結果として総語数に増加が見られたことから、構造マップの利用が総語数の増加に有効であると判断してもよいと思われる。例1は、本研究③において、よく整理できている構造マップの例である。これを見ると、本文中のキーワードを丁寧に抜き出し、図式化することにより視覚的にもこの生徒の考えを理解しやすくしている。

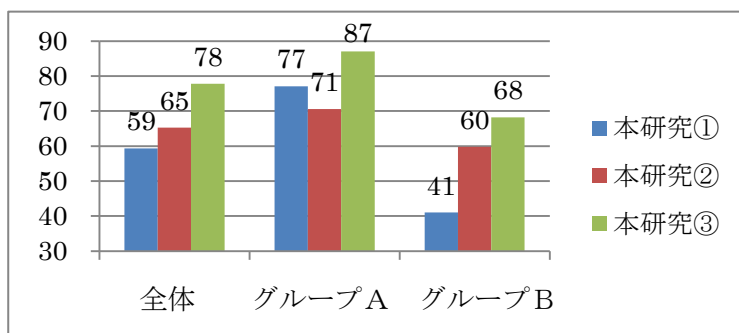
次に本研究①②③それぞれの、

例1 よく整理されている構造マップの例



生徒のライティング課題の提出物における総語数を比較した。後掲の表 6 を見ると全体としては研究が進むにつれて総語数が増加したことがわかる。また、本研究①における総語数の上位・下位それぞれ 50%の生徒をグループ A 及び B とする。そのグループ別に語数の伸びを見ると、グループ A の生徒は 10 語の増加であったのに対し、グループ B の生徒は 27 語増加していることがわかる。事前の仮説を裏付けるように、全体として総語数の増加が見られた。特にグループ B の生徒における増加率は非常に高いものであった。

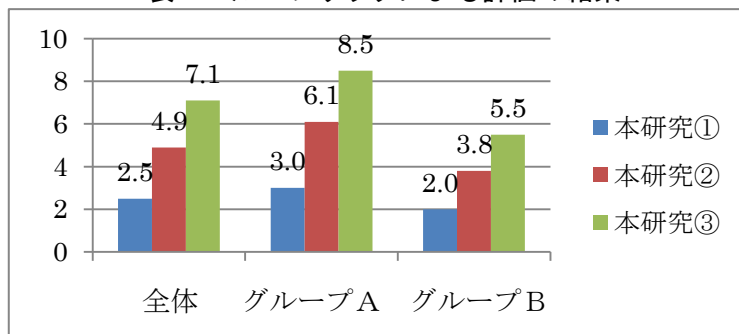
表 6 総語数の変化



6.2 仮説 2 に対する検証 (パラグラフとしてのまとめ)

本研究①②③についてルーブリック (表 2) による評価を実施した。結果は表 7 のとおりある。ここでは全 10 項目中、達成できている項目数を比較した。これを見ると、生徒全体としては研究が進むにつれてルーブリックによる評価が上昇したことがわかる。また、本研究①におけるグループ A、B それぞれの生徒別に語数の伸びを見ると、グループ B の生徒は 3.5 ポイントの増加だったのに対し、グループ A の生徒は 5.5 ポイントも増加していることがわかる。したがって、特に総語数の多かった生徒にとっては、パラグラフとしてのまとめを意識した指導の効果が大きかったことがわかる。

表 7 ルーブリックによる評価の結果



以下の表 8 は、ルーブリック評価の項目別達成度を示したものである。

表 8 ルーブリックの項目別達成度

グループ A			グループ B			ルーブリックの項目
①	②	③	①	②	③	※ ①～③はそれぞれ本研究①・②・③を指す
	◎	◎		◎	◎	(a) 何について書くのか述べている
◎	◎	◎	◎	◎	◎	(b) 印象に残ったフレーズを示している
	△	◎			△	(c) そのフレーズを選んだ理由を 3 つ提示している
◎	◎	◎	△	△	△	(d) そのフレーズを選んだ理由きちんと説明している
	△	◎			△	(e) 主題文と支持文がそれぞれ書かれている
	△	◎			△	(f) 列挙・順序に関する表現を使っている
	△	◎		△	◎	(g) 例示・追加に関する表現を使っている
						(h) 対比・類似に関する表現を使っている
◎	◎	◎	△	△	△	(i) 原因・理由・結果に関する表現を使っている
		△				(j) 言い換え・要約・結論に関する表現を使っている

◎ ; 70%以上の生徒が達成 △ ; 50%以上の生徒が達成 空欄は達成率 50%未満

表 8 において、パラグラフとしてのまとめに寄与する (a) ~ (e) の項目において、グ

グループAの生徒の70%以上が、そしてグループBの生徒も50%以上が達成できていることがわかる。英語表現リストの活用状況を示す(f)～(j)の項目を見ても、グループAの生徒は有効に活用できている状況であった。グループBの生徒は普段からよく利用する表現については利用できていたが、なじみのない表現については、あまり利用できていなかった。

総じてループリックによる評価は上昇しており、それは英語表現リストの活用度が高まっていることを示している。生徒の立場として、どのような英文を書くことが良い評価につながるのかというポイントとしてのループリックが示されたことと、それを達成するための手段としての英語表現リストを手にするにより、ライティング活動が活性化されたと言えるだろう。そしてその結果、パラグラフとしてまとまりのある英文に近づいてきたものと言える。

次の例2は、グループAのある生徒の本研究①及び③におけるライティング課題の提出物である。

例2-1 グループAのある生徒の本研究①におけるライティング課題の提出物

My most impressive sentence is “I told you I wasn’t mad.” ←(b)印象に残ったフレーズ
Because I was impressed by the strength of his feeling. ←(d)印象に残った理由の説明
I thought he was very hard worker. Because he continued learning, and didn’t give up. To have dreams is very important. And I didn’t know “Malawi”, one of the poorest countries in Africa. Japanese is usually lead a rich life, so we have many foods and waste electricity. But Malawi people is usually poor, so they were not enough food and electricity. ←(i)原因・結果・理由に関するフレーズ
Read this story, we are luxurious and rich life.

総語数 92 語 ループリック評価 3 点

例2-2 同生徒の本研究③におけるライティング課題の提出物

My impressive sentence is “it is very important for you to think about these problems whether or not you live in Okinawa.” ←(b)印象に残ったフレーズ
Because I haven’t thought about these problems ever. ←(d)印象に残った理由の説明
First, I can’t believe the U.S. bases now occupy about 18% of the main island of Okinawa.
Second, There is noise pollution problem. For example, Military planes frequently come and go, and make lots of noise on the residential area. ←(g)例示に関する表現
Finally, the number of the crime by the Americans are increasing while Japanese police can’t catch them.
(c)印象に残ったフレーズを3つ提示, (f)列挙・順序に関する表現, (h)対比に関する表現
In short, these problem are very difficult to solve, but Okinawa people wish for a solution. That’s why, we have to think about them. ←(j)要約に関する表現, (i)結果に関する表現, (e)主題文と指示文を提示

総語数 129 語 ループリック評価 9 点

本研究①(例2-1)では総語数は平均より多いものの、ループリック評価が3点であり、パラグラフの構成としてはまとまりを欠く内容であった。他方、本研究③(例2-2)においては、総語数が37語増加し、さらにループリックによる評価は6ポイント上昇した。内容としても、沖縄県が抱える諸問題についての記述を簡潔にまとめた上で、自身の考えを結論として述べることができおり、パラグラフとしてまとまりのある英文を書くことができている。次の例3は、グループBのある生徒の本研究①及び③におけるライティング課題の提出物である。

例 3-1 グループBのある生徒の本研究①におけるライティング課題の提出物

I read lesson 1, William said “You believe in yourself and keep on learning on your own.”
 ←(b)印象に残ったフレーズ
 This word move my heart. I worry about study and the future course. It has been encouraged the word.
 Because He trued a his dream to study. ←(i)理由に関する表現

総語数 43 語 ルーブリック評価 2 点

例 3-2 同生徒の本研究③におけるライティング課題の提出物

I read History of Okinawa.←(a)何について書くのか
 I like the sentence, “We can feel culture” ←(b)印象に残ったフレーズ
 because some of Okinawa arts are very unique. ←(d)印象に残った理由の説明
 For example, Ya chimun is pottery of Okinawa. ←(g)例示に関する表現
 It has long history, and unique color and shape influenced from Japanese and Chinese culture.
 Ya chimun is used for pouring awamori. And Dyed textiles. Okinawa is the prefecture that has most kind of dyed textiles in Japan. The textiles are light and also the clothes are cool. That’s why I want to see many kinds of clothes. I want wear.←(i)結果に関する表現

総語数 90 語 ルーブリック評価 5 点

例 2 に比べ、パラグラフとしてのまとまりはまだまだ弱いものの、ルーブリックによる評価は 3 ポイント上昇した。総語数も 47 語増加し、自身の考えをより表現できていると判断できる。

6.3 情意面の比較

本研究②（7月）及び本研究③（10月）の終了後に実施したアンケート調査をまとめたものが表 9 である。これらの結果はいずれも仮説 1 及び 2 に対する上述したような検証を裏付けるものである。また生徒のコメント（自由記述部分）の抜粋は以下のとおりである。

「構造マップを書くのに慣れてきたので頭の中が整理され書くべき内容がはっきりした。」

「ルーブリックを意識することで、自分のライティングの質が上がった気がする。英語表現リストも使いやすかった。英文を読むときにも役に立ちそう。」

表 9 アンケート調査の結果 (n=119)

	質問内容	7月	10月
1	構造マップ作成は、構想を練るのに役立つ。	70%	85%
2	構造マップ作成は、ライティングに役立つ。	71%	86%
3	英語表現リストは、重要表現を知るのに役立つ。	95%	97%
4	英語表現リストはライティングの構成を知るのに役立つ。	95%	96%
5	ルーブリックを意識しながらライティング課題に取り組めた。		98%
6	ルーブリックはライティングの質を高めるのに役立つ。		91%
7	数回のライティング課題を通じて、自分のライティング力が（少しずつではあるが）向上したと感じる。	88%	88%
8	数回のライティング課題を通じて、ライティングに対する抵抗感が（少しずつではあるが）減少したと感じる。	76%	84%

※表中の％は、「当てはまる」「やや当てはまる」を選んだ生徒数の割合を示す。

6.4 結論

以上のような研究の結果から、次のように結論づける。

結論1 構造マップを利用することで、ライティング活動の際に自身の考えを整理しやすくなり、さらに総語数が増加する。

結論2 英語表現に関するリストやルーブリックを継続的に与えることで、パラグラフとしてまとまりのある英文を書くことができる。

6.5 考察

今回の研究から、構造マップをアイデア創出の段階で利用していくことが、自身の考えを整理しやすくし、結果としてアウトプットの量（今回の研究においてはライティング課題の提出物における総語数）が増えることが確認できた。しかしながら構造マップの定着方法に関しては依然として問題があると感じている。本研究③の段階においても、十分に構造マップの意図を理解できていない生徒もいた。段階的な指導方法を工夫することで、その有用性を多くの生徒に理解させていく必要性を感じる。今後は、構造マップの質をより高いものにしていく指導方法を研究していきたい。それを基にライティング活動やスピーキング活動の活性化を図るとともに、リーディング活動後の要約活動や、ディベート活動における事前準備等にも、構造マップの適用を検討するなど、さらなる授業改善に努めていきたい。

パラグラフとしてまとまりのある英文を生徒が書けるようになる、という目的を十分に達成できたとは言えないが、英語表現リストや、その活用を促すようなルーブリックについては、一定の効果があったと確信している。しかし、ルーブリックについては、ライティング課題の提出物を目的に応じて適切に評価できるよう、十分に精査する必要があると感じている。また、ライティング課題の提出物を見ると、主題文と支持文を明確に示せていない生徒が多かった。主題文と支持文を理解できないまま構造マップを作成してしまったことが直接的な原因であり、その背景には、主題文と支持文の関係について事前に十分に指導しきれなかった点が挙げられる。今後は4技能の統合という観点から、英文中の主題文と支持文を見つけ出す等の活動を行う際にも、ライティング活動にまでつながるような指導を実践していきたい。

7 引用文献等

7.1 引用文献

大喜多喜夫（2004）『英語教員のための授業活動とその分析』 昭和堂

大井恭子（編）（2008）『パラグラフ・ライティング指導入門』 大修館書店

富田祐一（2002）『MI理論を応用した新英語指導法』 くろしお出版

米崎里（2012）『アウトプット重視の英語授業』 教育出版

Widdowson, H.G. (1983) *Learning purpose and language use*. Oxford: Oxford University Press

7.2 参考文献

Grabe, W. & Kaplan, R. (1996) *Theory&practice of writing*. New York: Addison Wesley Longman.

Kang, S (2004) Using visual organizers to enhance EFL instruction. *English Language Teaching Journal*, 58(1), 58-67.